

この間、2月27日には所内で考古研究所の最新発掘成果についての報告会があり、3月9日には、漢長安城での5年間の日中共同発掘調査成果について記念講演会をおこないました。町田所長のあいさつに続いて、劉慶柱所長「漢長安城桂宮出土の玉牒研究」、李毓芳研究員「漢長安城桂宮の発見と研究」、張建峰所員「漢長安城桂宮第4号建築遺構の発掘」の講演がありました。OHP、スライドを用いた話は分かりやすく、好評でした。とくに、劉所長が講演した玉牒は、中国最初の出土品であるだけでなく、新の王莽が泰山で封禅を試みた史料を裏づける貴重な発見として、専門家の驚きを誘っていました。

(平城宮跡発掘調査部)

▲ 興福寺中金堂出土鎮壇具の発見 —金色に輝く遺宝—

昨年1月から9月まで続いた興福寺中金堂の調査で、奈良時代初めの創建時の須弥壇築成にともなう鎮壇具の数々が出土しました。興福寺中金堂鎮壇具は、明治の初年に大量に発見され、国宝に指定されています。今回の調査では、明治期に積み直された須弥壇の下層から、明治時代の初めに掘り荒らされた土に紛れ込んだものと思われる金延金や砂金、水晶玉、琥珀玉、瑠璃玉、和同開珎、真珠玉などがみつかっています。1月30日に興福寺で記者発表をおこないましたが、翌日の朝刊では、多くの新聞が一面にカラー写真を掲載する扱いでした。

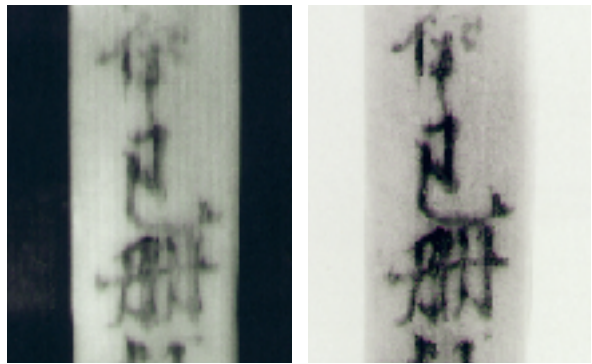
(平城宮跡発掘調査部)



2002年1月31日産経新聞朝刊紙面から

▲ デジタルカメラ CCD の赤外線撮影への応用

平城宮跡発掘調査部の写真資料調査室では、日々の撮影の他に文化財の写真に関する保存や応用の技



赤外テレビカメラの画像 デジカメ CCD 方式の画像

術についても、精力的に取り組んでいます。最近注目された仕事は「キトラ古墳」のデジタルカメラでの撮影でしたが、そのほかにも新しいデジタル技術に応用した調査法を新たに提案し、成果をあげています。

デジタルカメラの CCD は、本来は目に見えない赤外線的光もとらえられますが、通常の撮影ではこの光がじゃまになるので意図的にカットしています。これを逆手にとり通常の光をカットして赤外線的光だけをとらえるようにカメラに細工をして撮影すれば、これまで利用されてきた赤外線フィルムやテレビカメラでの赤外線撮影よりも高精度な赤外線画像を得ることができます。奈文研ではこれを出土した木簡資料の判読や文字情報の詳細な画像記録に役立てています。

また、撮影したデジタルデータは保存の面で問題がありますので、高精度なフィルム出力機により白黒フィルムに出力して保存しています。

(平城宮跡発掘調査部)

▲ 研究会の開催

「わが国鑄銭技術の史的検討」研究集会

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、飛鳥池遺跡から出土した富本銭の鑄造関係遺物をもとに、富本銭の鑄



出土遺物を前にしての検討風景

造技術の復元的研究をつづけています。その成果をもとに、2月23・24日の両日、上記の研究集会を当調査部講堂で開催しました。

この会は、各地で鑄銭遺跡の調査に携わる考古学研究者や、文献史学、鑄造技術の研究者が一堂に会して、古代から中世、そして近世の鑄銭技術（お金づくりの鑄造技術）を比較検討し、技術的な系譜を明らかにしようとするものです。

これらの研究成果を受けて、当調査部では、富本銭の鑄造実験に着手しました。できあがったばかりの古代の富本銭が、どのような色で光り輝いていたのか、それがもうすぐ解明されようとしています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

遺跡 GIS 研究会

埋蔵文化財センター文化財情報研究室では、2001年11月16日に、6回目となる遺跡 GIS 研究会を「測量計測技術と遺跡 GIS」のテーマのもと開催しました。この会では、GIS（地理情報システム）の考古学分野での応用を研究しています。研究発表のほか、機器やソフトの展示もおこない盛会でした。

研究発表は、国際日本文化研究センターの森洋久氏が「GLOBALBASE：中心をもたない歴史地理情報システム」、国際航業の本郷賢児氏が「レーザスキャナによる文化財の計測」、倉敷紡績株式会社の桜井靖久氏が「市販デジタルカメラによる写真計測システムについて」、京都市埋蔵文化財研究所の宮原健吾氏が「オルソ画像と遺跡調査への応用」、奈良大学の泉拓良氏が「レバノンでの GIS 考古学の実践」の題でそれぞれおこないました。

簡便でありながら精度の高い各種システムの開発が進んでいることがよくわかり、文化財関連分野での応用例もより高度なものが見られるようになりました。

（埋蔵文化財センター）

『法隆寺古絵図集』『法隆寺考古資料』

『法隆寺の至寶』の一環として編集を開始しながら、諸般の事情により刊行に至らなかったものが、当研究所の史料として公刊されつつあります。昨年11月には、法隆寺にさまざまな経緯で伝来した中世から近代の指図・絵図269点を図版で紹介する『法隆寺古絵図集』が刊行されました。続いて今年3月に



「法隆寺考古資料」より抜粋 飛鳥～江戸時代の食器

は、法隆寺に残る土器、木器、金属器等の考古資料を発掘品、保管品を含めて掲載、解説した『法隆寺考古資料』が刊行されます。『法隆寺古絵図集』は平城宮跡発掘調査部史料調査室が編集にあたりました。また、『法隆寺考古資料』は、平城宮跡発掘調査部考古第一調査室と第二調査室が整理をすすめ、後者が編集を担当しました。編集・刊行にあたっては、法隆寺に多大のご協力をいただきましたことに謝意を表します。

（平城宮跡発掘調査部）

研究室紹介

遺跡研究室（文化遺産研究部）

奈文研に研究所発足当初からあった建造物、歴史の2研究室に加え2001年4月に新設されたのが遺跡研究室です。これらの3研究室をあわせて文化遺産研究部が組織されたわけです。

遺跡研究室の仕事は遺跡の整備に関する調査研究と、庭園史に関する調査研究の2本柱からなっています。これらの調査研究はこれまでも奈文研の調査研究の一つとして、古くは建造物研究室、その後は平城宮跡発掘調査部計測修景調査室を中心として取り組んできたテーマです。ときに庭園が建造物研究室の主たる研究テーマとなった時期もありましたが、建造物研究室、計測修景調査室ともに本務は別のと



大湯環状列石（秋田県鹿角市）の整備状況